現場に行かなければわからないことがある

外国でのボランティア経験が豊富な細川高頌さん（教育人間科学部4年）。観光や留学ではない形での渡航を考えていた彼が、現地でつかんだものとは――。

国際協力に関心があった細川高頌さんは、2013年の夏、南米パラグアイに大学のプログラムを通して、約1カ月間滞在し、小学校建設を支援するボランティアに参加した。

「もともと海外への憧れはあったのですが、教育人間科学部人間文化課程の藤掛洋子先生から、国際協力には実際にその場所に行ってみなければわからないことがたくさんあると言われ、パラグアイに行ってみたいと思うようになりました。そのこともあって、先生が長年支援している学校建設プロジェクトへのボランティア参加を決めました」

外国で行う初めてのフィールドワーク。入念に下調べをして現地に渡ったが、予備知識どおりだったのはほんの一部だった。

「100人の人がいれば、100通りの考え方があることを知りました。学校建設に関しても、さまざまな理由で賛成する人や反対する人がいました。国際協力という言葉に抱いていたイメージと、現実との差に戸惑いました」

何がやりたいのかを自分の頭で考える

パラグアイから帰国して2年後の15年。今度は、JICA※ボランティア（横浜国立大学連携案件）に応募し、南太平洋の島国・トンガの保健省に広報活動のボランティアとして11カ月間派遣された。トンガでは糖尿病患者が多く、健康意識の改革が課題となっていた。そこで、生活習慣病予防を促すアニメーションの製作や健康増進のためのエアロビクス大会の運営などに携わったという。

「まず驚いたのは、トンガの人たちの食生活です。例えば、食パン一斤の中身をくりぬいて、その中にスパゲティをたっぷり詰めたものをおやつに食べたりします。この食生活を見て、糖尿病患者が多いのも納得しました」

一方、日本人とトンガ人の働き方の違いに戸惑ったという。

同僚のトンガ人と、制作した動画を確認する細川さん

「トンガの人たちはのんびりしていて、仕事が思うように進まないことが多かったんです。自分一人でやったほうが早いという思いと、彼らに技術を伝えたいという思いが、いつも交錯していました」

細川さんにとって、大学生活とはなんだったのだろうか。

「人間文化課程に入って良かった点の一つは、とにかく自由なことです。ボランティアに取り組んだり、サークル活動に打ち込んだり、留学したりする人もいます。みんな、それらの活動を大学にやらされているのではなく、主体的にやっているんです。自由な分、大学生活では、自分が何をやりたいのかを自分の頭で考え行動できるようになったことが一番の収穫ですね」

部屋を借りていたトンガの大家さんファミリーと

教育人間科学部人間文化課程4年
細川高頌

ほそかわ・たかのぶ／1993年、大阪府生まれ。私立清教学園高校卒。トンガには、食パンの中に酢飯を詰めたものを寿司だと思っている人たちもいたとか。

※独立行政法人国際協力機構